

科目区分 大学院：教育学研究科教育実践高度化専攻
 授業科目 「エクステンション活動3『授業力向上』」
 タイトル 授業科目と実習との融合を図るエクステンション活動3「授業力向上」の在り方
 所属 教育学研究科教育実践高度化専攻(教職大学院)
 氏名 小田 哲志

1 はじめに

教職大学院では、前期に「授業開発の理論と実際」「授業研究の開発実践」「授業における学習支援と指導法の事例分析」、後期に「教材開発演習」により、授業力向上に向けた理論を中心とする学びを行っているが、これらの知を実践でいかに生かしていくかが重要である。

大学院の学生は、これらの知を生かしつつ、連携校において学級担任等の指導教員の助言を得て授業実践を行うこととしている。既に教育職員一種免許状を取得していることから、実習内容にも自由度が与えられる等学校からも一定の信頼を得ているが、講師経験のある者を除き、学部での教育実習以外では実際に授業を実施した経験を持つ者は少ない。

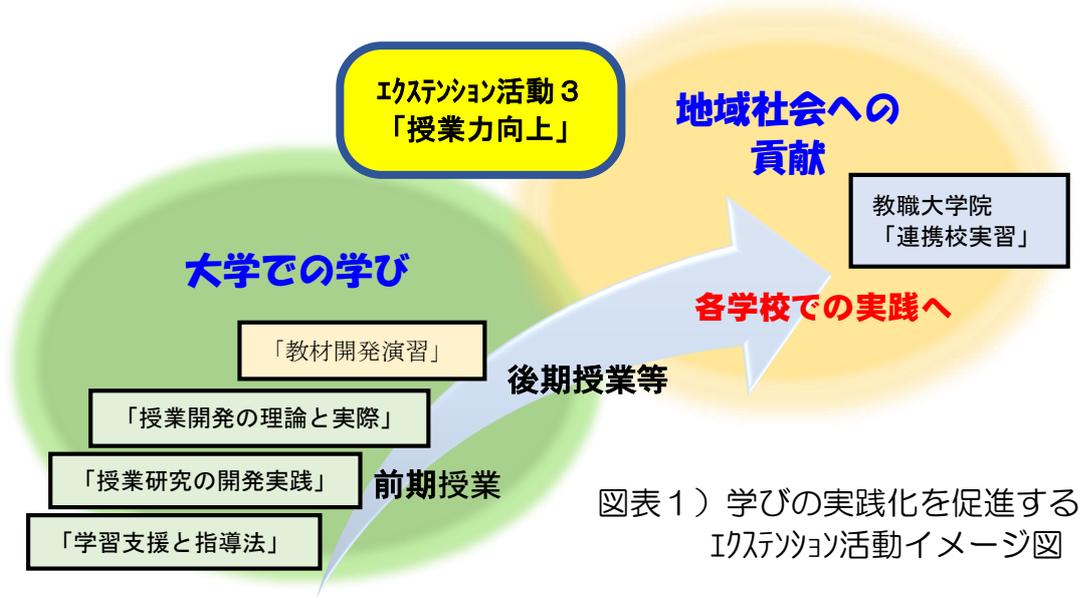
そこで、前出の授業科目による学びを具体化する仲立ちの場としてエクステンション活動3「授業力向上」（以下、「授業力向上」活動と呼ぶ。）を

位置づけた。これにより、各授業科目で得た知見を生かしながら、各実習校の実態に応じた授業づくりを行おうとするものである。

主な内容として、①希望学生による事前教材研究（授業実践を想定した学習指導案、板書計画等づくり）、②「授業力向上」活動で、学習指導案審議や模擬授業を通して検証、③それぞれの実習校で実践し大学に帰って省察、というものである。

2 「地域社会を核とした教育と研究のつながり」について

これまで、ともすると大学での研究や学びが教育現場での実践と乖離することがあった。「授業力向上」活動は、このような実態を踏まえて、教員養成の在り方を見直す過程で設置に至った教職大学院の趣旨に沿うものであり、「理論と実践の往還」を円滑に促進させるよりよい活動の一つと言える。



図表1) 学びの実践化を促進するエクステンション活動イメージ図

図表1) は、授業科目とつまり、研究と実践の仲立ちとする活動を置くことによつて、研究はより

スムーズに実践化、具体化を図ることができると共に、その成果や課題をいち早くフィードバックでき

るものと思われる。教職大学院での学びは、学校という地域社会の教育をいかによりよいものにするかということに他ならないが、そのためにはそれをつなぐ一工夫が必要である。図表1)に示す通り、「授業力向上」活動は、大学での研究、習得した学びを地域における教育活動で活用していくよりよい手段であり、まさに教育と研究のつながりをより確かなものに行っていると感じている。

3 「授業力向上」活動の実施状況

(1) 期日

- ① 11月8日(火)
- ② 11月15日(火)
- ③ 11月22日(火)
- ④ 11月29日(火)

(2) 内容

- ① 指導案審議
- ② 模擬授業及び研究協議
- ③ 授業後の省察、再実践化

(3) その他

エクステンション活動は、「授業力向上」活動の他に「書写指導」活動、「運動部活動」活動、「学級経営」活動等、本学の教育課程にあまり組み込まれていない、または、実践につながりにくいと思われる様々なメニューを用意している。

4 結果

(1) 本活動に対する院生の感想

- 授業力向上エクステンションでは、現職の先生方や院生を交えて指導案審議や模擬授業を繰り返し行うことで多面的・多角的に授業を分析することができた。また、模擬授業では、改善点が多く見つかり指導していただく中で、授業力を向上させることができ、充実した活動となった。
- 授業力向上エクステンションを通じて、私は教材を多様な視点から見る力を身につけることができた。教科や校種を越えて、仲間達と真剣に考え議論することで、教材が姿形を変え、授業が面白くなっていく経験は、とても大きな

財産となった。

- 授業力向上エクステンションを通して、自分の授業の指導案・教材・授業のパフォーマンス等について、多くの仲間・先生方から多様な視点から指導していただき、自分の授業をいろいろな視点から、そして広い視野で見つめて、よりよいものになるよう省察する力を養うことができたと考える。
- 実習校でいよいよ授業を行う時期となり、不安を抱えていたが、このような活動により自信を深めることができた。仲間が頑張っている姿が大いに刺激を受け、助け合い、支え合いを通してチームで取り組んでいく中で、徐々に仲間意識が高まったように感じた。

(2) 質問紙による効果測定

【方法】

図表2)の通り、このアンケートは、教職大学院作成の授業力アンケートで「今現在あなたの授業力の実践的な技能はどの程度高まっているか」という20項目の問に対して4件法で問うものである。なお、記名式とした。

教職大学院授業力アンケート	
1	児童生徒の到達度や意欲などの学習状況を的確に把握し、授業改善のために整理する
2	学習過程や目的に応じて、教材・教具を工夫する
3	ねらいを達成するのにふさわしい教材や教具を選択し、適切な使い方をする
4	教材について正しく理解したり、深く理解したりする
5	教材や教具に関する情報を収集し、教材研究に活かす
6	単元目標や授業目標を明確にし、児童生徒の状況に応じて単元の指導計画や一単位時間の授業を計画する
7	学習過程を工夫し、体験的な学習や問題解決的な学習を積極的に取り入れる
8	一斉学習とグループ学習や個別学習など、適切な学習形態を工夫する
9	適切な学習評価や授業評価の場を設定する
10	児童生徒の理解や思考に役立つような構造的な板書を行う
11	児童生徒の思考を促したり焦点化したりするために適切な発問を行う
12	的確な指示を行ったり、分かりやすく説明を行ったりする
13	児童生徒の応答に対して、適切な反応を示すこと
14	全体だけでなく、個の学習状況にも配慮すること
15	児童生徒の思いや考えを引き出すこと
16	児童生徒の反応を生かしながら授業を構成(再構成)する
17	先生や友達の話をしっかり聞ける状況を作り出す
18	支持的風土づくりに努め、発言しやすい状況を作り出す
19	児童生徒の興味関心を高め課題意識や学習意欲を持たせる
20	ICTを効果的に活用する

図表2) 教職大学院授業力アンケート

【時期】

第1回…平成28年4月、第2回…平成28年10月、第3回…平成29年2月の計3回実施

【因子分析の結果】

図表3)の通り、本アンケートの因子分析の結果を検討し、三つの下位項目に分類した。

一つ目の項目を「教材研究を通して、授業構成等を事前に計画する力(授業構成計画力)」、二つ目の項目を「授業中に起こる様々な問題に対して、適切に問題に対応する力(問題対応力)」、三つ目の項目を「ねらいを達成するために適切な場面を設定する力(場面設定力)」として、図表4)に示す分析を行った。

パターン行列^{a)}

		因子		
		1	2	3
教材研究を通して、 授業の構成等を事前に 計画する力	ねらいを達成するために教材教員選抜し適切に使う	.929	-.170	-.091
	支持的風土に努め発言しやすい状況を作り出す	.880	.174	-.322
	思考を促し焦点化する適切な発問を行う	.747	-.022	.184
	反応を生かしながら再構成する	.661	.052	.203
	思いや考えを引き出す	.619	.269	-.086
	理解や思考に役立つ構造的板書を行う	.588	-.130	.070
	学習状況を把握し授業改善のために整理する	.586	.157	.163
	教材を正しく深く理解する	.542	-.043	.170
授業中に起こる問題に 適切に対応する力	応答に適切に反応する	-.130	1.096	-.038
	友達の話をしっかり聞ける状況を作り出す	.076	.752	-.142
	ICTを効果的に活用する	-.070	.557	.311
ねらいに達成するために 適切な場面を設定する力	体験的で問題解決的学習を行う	-.072	-.201	.787
	学習評価や授業評価の場を設定する	.141	.127	.698
	一斉やグループや個別学習の適切な学習形態を工夫する	.035	.240	.499

因子抽出法: 最大法
回転法: Kaiserの正規化を伴うプロマックス法
a. 5回の反復で回転が収束しました。

図表3) 因子分析の結果

【一元配置分散分析の結果】

この結果、1回目と2回目、1回目と3回目には、前述のいずれの項目にも有意差は認められなかった。2回目と3回目については、「授業構成計画力」の向

上について、有意差が見られた (p < .05)。その他の項目「問題対応力」「場面設定力」については変化が見られなかった。

多重比較

Tukey HSD

従属変数	(I) 調査回数	(J) 調査回数	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
						下限	上限
授業構成計画力	1.00	2.00	.39316	.21426	.172	-.1294	.9157
		3.00	-.15079	.21025	.755	-.6636	.3620
	2.00	1.00	-.39316	.21426	.172	-.9157	.1294
		3.00	-.54396*	.21426	.040	-1.0665	-.0214
	3.00	1.00	.15079	.21025	.755	-.3620	.6636
		2.00	.54396*	.21426	.040	.0214	1.0665
問題対応力	1.00	2.00	.35577	.21002	.221	-.1564	.8680
		3.00	.17857	.20610	.664	-.3241	.6812
	2.00	1.00	-.35577	.21002	.221	-.8680	.1564
		3.00	-.17720	.21002	.679	-.6894	.3350
	3.00	1.00	-.17857	.20610	.664	-.6812	.3241
		2.00	.17720	.21002	.679	-.3350	.6894
場面設定力	1.00	2.00	.32601	.22268	.320	-.2183	.8703
		3.00	.31746	.22744	.354	-.2385	.8734
	2.00	1.00	-.32601	.22268	.320	-.8703	.2183
		3.00	-.00855	.23144	.999	-.5743	.5572
	3.00	1.00	-.31746	.22744	.354	-.8734	.2385
		2.00	.00855	.23144	.999	-.5572	.5743

*. 平均値の差は 0.05 水準で有意です。

図表4) 一元配置分散分析の結果

5 成果と課題

【成果】

(1) 学生の感想等による授業者（筆者）の評価

① 「授業力向上」活動の質の保障の担保

1号棟1階リフレクシオンルーム、3階教育実践開発室に分かれて実施した。時間の空いている教員が参加したが、実務家教員、研究者教員それぞれから多面的・多角的な専門性の高い助言を受けることができた。

② 学生の相互作用による相乗効果

学生はそれぞれの実習校で意欲的に授業実践をさせていただくことが多くなったが、これは「学力向上」活動の大きな成果と言える。授業をT1、または、T2で実施した学生の情報を共有することによって、挑戦意欲が高まり、実施回数を重ねた。実際に行った者しか感じ得ない情報の共有により、その後の省察の質も格段に上がってきている。

③ その後の活動へと発展、活動の自立化

指導案審議と模擬授業を延べ12回実施し、そこ以降は学生の自主的活動に委ねた。そこに実務家教員、研究者教員が必要に応じて参加するという方法をとったが、空き時間を使って実習校での授業に備える学生と教員の姿を目にすることが多くなった。

この様子は、同じ目標を持って共に切磋琢磨する集団、これは良好な職員室で見られる同僚性に似たものがあるように思われた。

「授業力向上」活動を通して、ただ単に授業力が高まったというだけでなく、様々な相乗効果が得られたと感じている。

(2) 質問紙調査による評価

この質問紙調査の結果では、本調査の「授業力」を構成する3つの下位尺度「授業構成計画力」「場面对応力」「場面設定力」の内、「授業構成計画力」が優位に向上しているという結果であった。

「授業力向上」活動では、指導案審議と模擬授業及び研究協議を中心に行ってきた。そのため、学生は、教材を吟味し、できうる準備を行った上

で指導を受け、実習校で授業実践を行い、授業後省察を行うというプロセスをとった。したがって、様々な角度からの助言を受け、教材をどう解釈するか、どう実践に結びつけるかという部分に関して、一定の自己評価の高まりが見られたのはこの活動のねらい通りであった。

一方、学生の相互作用、活動の自立化については、筆者の想像以上のものが見られたとの実感を得ている。「授業力向上」活動を含めたエクステンション活動全般が、院生の学修状況を大いに刺激し、よりよい影響を及ぼしたと考える。

【課題】

一方、本調査で向上しなかった項目は、授業中に児童生徒の様子を見ながら、適切に対応する力を表す事柄であった。学生がそのような力をまだまだ不十分であると感じ、自己評価に変化が見られなかったものと思われる。

このような事柄は、実践の中で「今回はうまくいった」とか「やっぱりうまくいかなかった」とかいろいろな感想も持つ。そうしながら何度もチャレンジする中でうまくいくコツをつかみ、よりよい方法を獲得する力と言える。

したがって、「問題対応力」「場面設定力」の向上には、「実践をより多く行うこと」だけでなく、「実践後の省察」「再挑戦による成就感」が重要であると思われる。逆に言えば、今回の「授業力向上」活動では、授業後の省察が不十分であったとも言える。学生は、授業前は多くの教員等から助言を受けたが、十分消化しきれないまま授業を実践している場合もあり、実践した授業の評価は「授業力」活動に参加していない当該校の指導教員によるものが主となる。

今後は、いかに省察活動を充実させ、再度挑戦させる機会を持たせ、「できた」と実感させるかが授業力向上の鍵となるものと思われる。

また、学生間の意欲格差をどう埋めるかという問題もある。相乗効果が多く見られた中、一部学生はこの波に取り残されていった。活動内容はおおむね評価できるが、このような点に今後適切に対応していく必要がある。